

編集後記：2020年の天候を振り返ると、まず「令和2年7月豪雨」が強く印象に残っている方が多いのではないかと思います。広範囲の大雨による多くの河川氾濫、広範囲の浸水、土砂災害など、大規模な被害に驚愕しました。次に、長い梅雨のあとの猛暑は、浜松で歴代全国1位タイの41.1℃を記録するなど高温となり、暑さが続く中でのマスク着用が、より一層暑さに拍車をかけたという印象でした。豪雨や暑さの印象が強く、夏以前の印象はやや薄れ気味ですが、前シーズンの冬は大暖冬でした。日本の冬平均気温偏差は統計開始以来最も高い記録になり、北日本・東日本の日本海側では降雪量が最も少ない記録を更新しました。今シーズンの冬はどうなるでしょう。

さて、2020年の天候以外を振り返ると、人それぞれ、色々な印象が残っているかと思いますが、何よりもコ

ロナ禍に振り回された2020年だったのではないのでしょうか。ちなみに、コロナ禍の「禍」は「わざわい」とも読むそうです。「わざわい」には「災い」もあります。が、「災い」と「禍」との違いは、阻止できる「わざわい」か、できない「わざわい」かで使い分けられているとも言われています。つまり「災い」は地震や台風など「阻止できない」自然災害などに使われ、「禍」は人の手や努力などによって「阻止できるわざわい」に使われるとのこと。コロナ禍では、阻止できた日がいっつも訪れるのか先が見通せない不安はありますが、感染しないための行動、感染を拡大させないための行動は、2021年も続くことになるでしょう。2021年は「災い」が少しでも減り、「禍」が早く阻止されることを願うばかりです。

(田口晶彦)